

日本基督教団 鎌倉雪ノ下教会牧師 大澤 正芳
牧師：7年 説教塾：4年 セミナー参加：4回

イーヴァントの黙想についての覚書

その黙想の冒頭において、イーヴァントは次のように語る。「キリストはご自身の道を持っておられる。ご自身に与えられた使命を持っておられる。それ故に、われわれは、われわれが、キリストを期待しているつもりを捨てなければならないのである。そして、キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない人びとと同じ人間にならなければならないのである。」

我々の4泊5日のセミナーにおいて、この黙想の言葉が、絶えず躓きであり、また、導きの光であった。マタイを招き、従わせる主とはどのような方なのか？罪人、徴税人と食卓を囲む主とは、どのような方なのか？ファリサイ派の人々に「行って憐れみを学べ」と命じられる主とは、どのような方なのか？それは、キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない我々を、自由に招き従わせた主人なのだ！キリストの自由な選び！有無を言わせぬご命令！キリストの主権！

イーヴァントの黙想の衝撃、彼がテキストから読み取っている仮借のない裁きと、そこから溢れ出している絶大な恵み、すなわち、「憐れみに満ちた審き」を下される主人、イエス・キリストのお姿。それを見て、理解して、さらに伝わるように語り出すのに、自分の頭も、言葉も何ともどかしいことか！

セミナーにおいて、我々は説得されなければならなかった。打ち碎かれなければならなかった。自分の領地を明け渡さなければならなかった。そのようにして、徴税人、罪人と成ろうとすることをやめなければならなかった。ファリサイ派に成ろうとすることを、やめなければならなかった。ただ、私たちの事実として、徴税人、罪人、ファリサイ派であらねばならなかった。しかし、まさに、そこで、キリストとその恵みに、全く服従しなければならなくされた。そのようにしてしか主は出会って下さらなかった。そのようにして、主は出会って下さった。

イーヴァントは語る。「徴税人たちが、主の呼びかけに、自分自身の側には動機がなくても、突然、従ってしまっている…しかし、真実を言えば、そこで語られていることが、ただこの転身の全重量は、主の呼びかけの中にあるということに他ならない。」ここにのみ、立ち上がる力があつた。

仲間たちと語り合った説教批評の言葉を思い起こしながら、考える。なぜ、この人は、このような語り方になったのだろうか？なぜ、あの人は、あのようにならなかったのだろうか？そこには、私たち説教者を立ちあがれないようにしている、キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない人びとと同じ状況、同じ人間がいる。何と、幸いなことか。そこにキリストが来て下さった。我々を立ち上がらせ、よみがえらせ、喜んで従う者として下さった主人がいらっしゃる。幸せな生き方、主イエスに従うとは、何という幸いな道。ある参加者の説教の言葉、「私たちは、その恵みに気付きさえすれば良い」。